

## 道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 28 年度 第 1 号 2016 年 9 月 30 日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

### 平成 28 年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（1 次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2016 年 9 月 1～5 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～500m の海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を下回った。
- ・ 魚群反応の強い海域は恵山岬沖。
- ・ 反応の比較的強い水深は 200～300m（海底に張り付いた反応は 250m 付近が中心）。
- ・ 漁獲物は、尾叉長 45～50cm が主体。
- ・ 水温は、水深 50m 以深はほぼ平年並み（±1℃以内）。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも渡島海域の 193 海区（恵山岬沖）には強い魚群反応がありました。しかし、胆振海域では、前年度に登別沖にみられた様な強い魚群反応は、今年度は観察されませんでした（図 1・2）。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年度の値を下回り、卓越年級群となった 2005 年級群（平成 17 年生まれ）が 4 歳となって産卵加入した 2009 年以降では、2013 年に次ぐ低い値となりました（図 3）。
3. 魚群反応は、水深 150～500m の範囲に観察されました。特に水深 200～300m にかけては比較的強い反応がみられましたが、海底に張り付いた反応は水深 250m 付近が中心となっていました（図 2・4）。
4. トロール調査の結果、鹿部沖の水深 270m 付近の漁獲物は、尾叉長 45～50cm のスケトウダラ成魚が主体となっていました（図 5）。
5. 調査海域の水深 50m 以深の水温は、ほぼ平年（2002 年度以降の平均値）並みとなっていました（±1℃以内）。ただし、水深 150～250m にかけては、南茅部沖では平年を約 1℃下回っていましたが、登別沖では約 1℃上回っており、渡島側で平年よりもやや水温が低い傾向がみられました。スケトウダラ成魚の生息に好適とされる 5℃以下の水温は、南茅部沖で水深 180m 以深、登別沖で同 210m 以深となっていました（図 6）。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11 月）の状態を予測するために実施しているものです。12 月以降の状況は、11 月下旬に実施する分布調査（2 次調査）により予測する予定です。調査終了後にスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

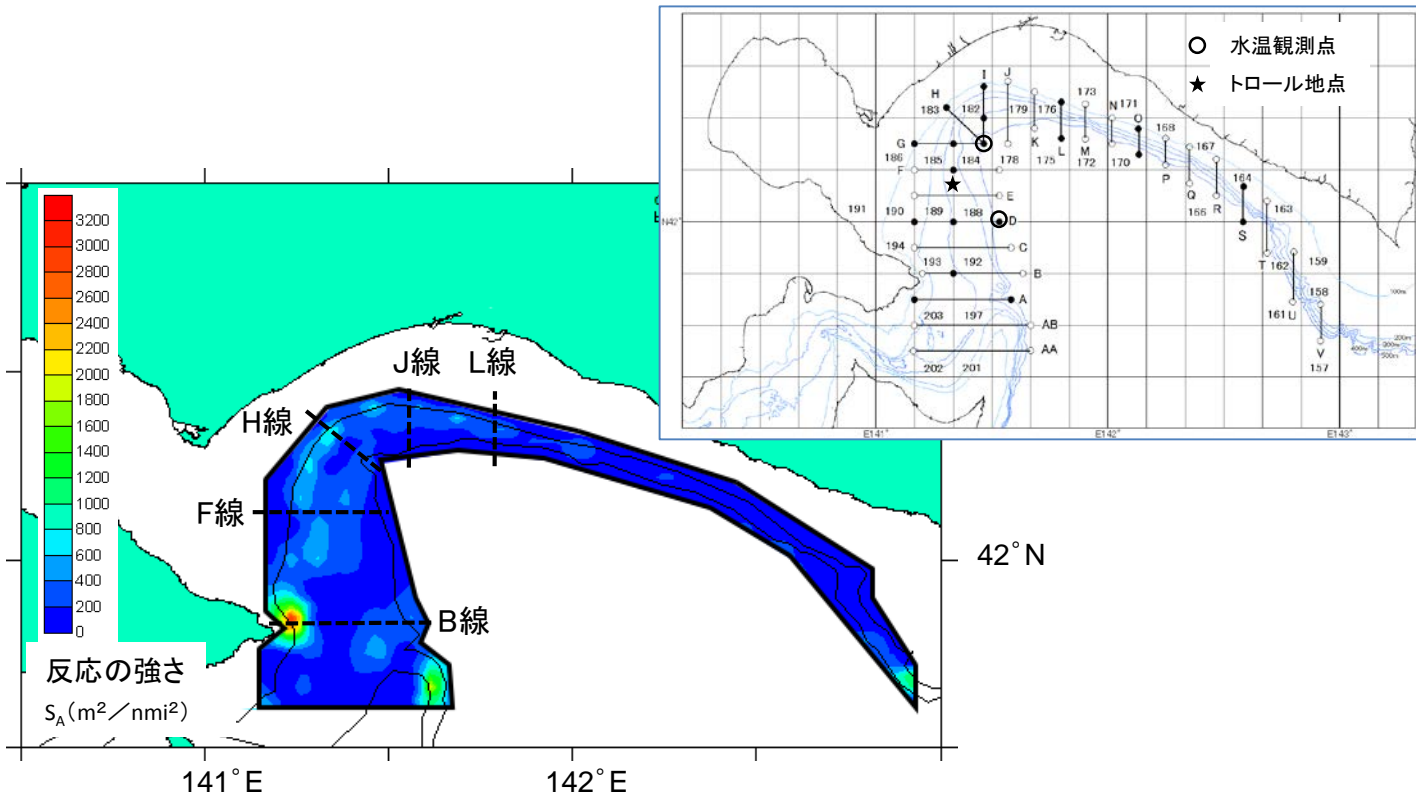


図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

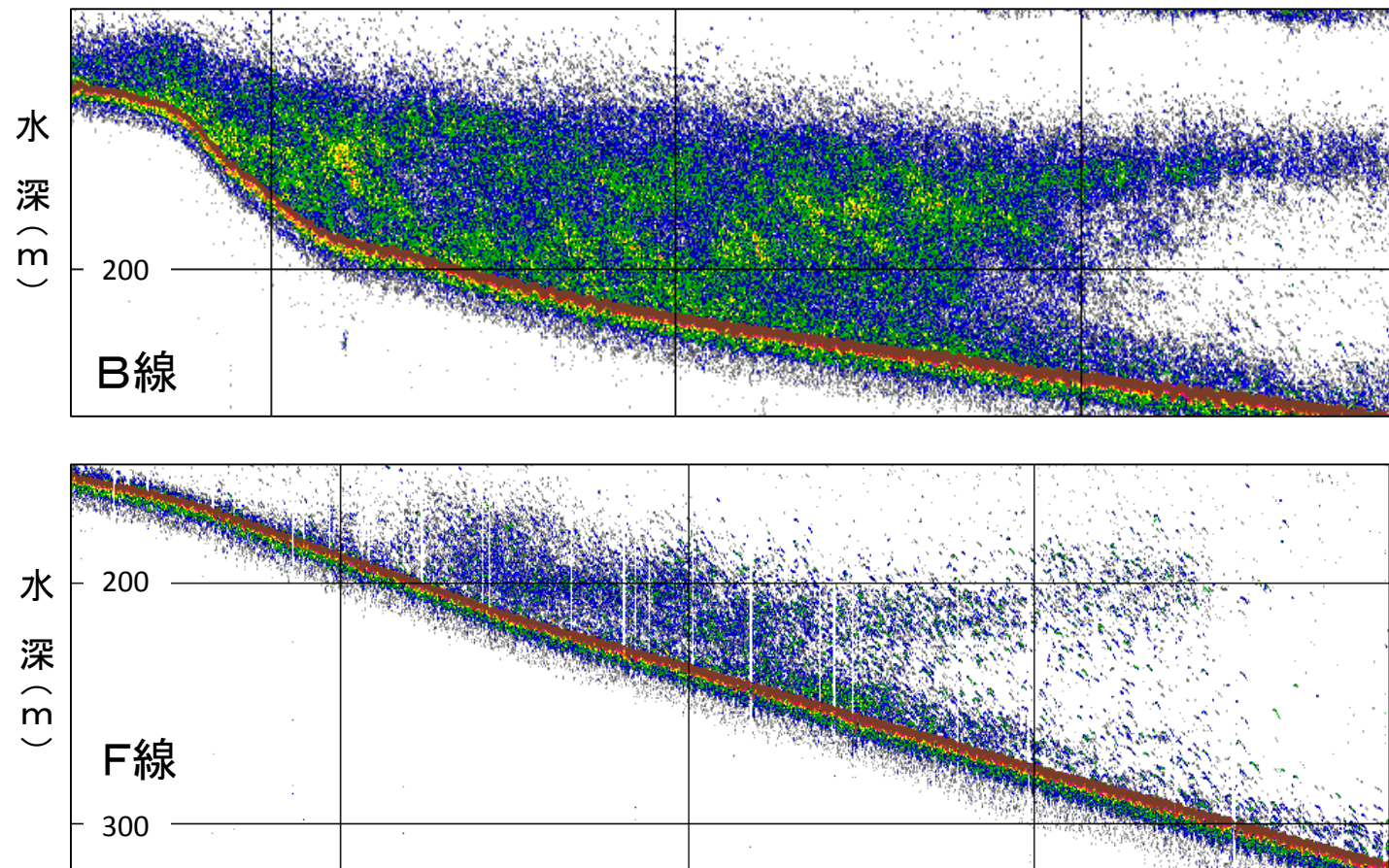
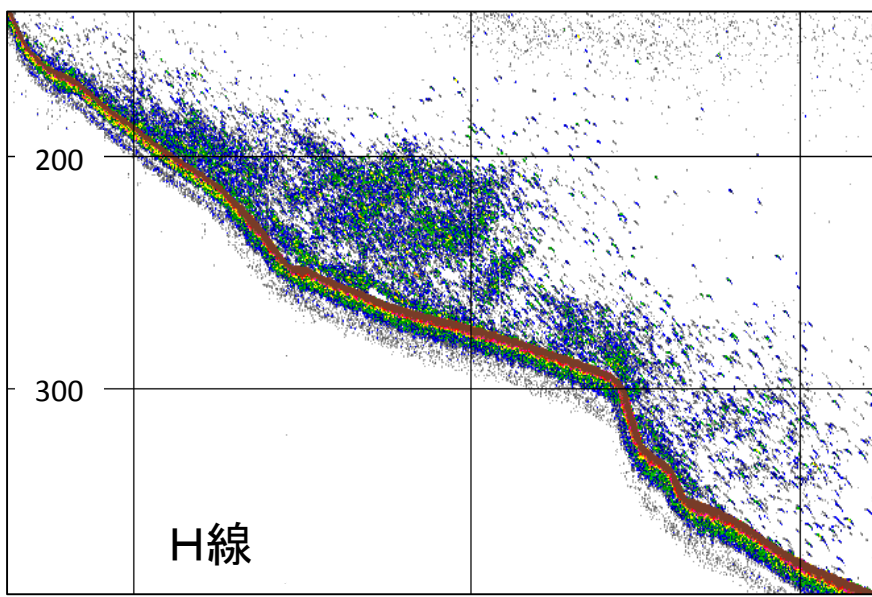


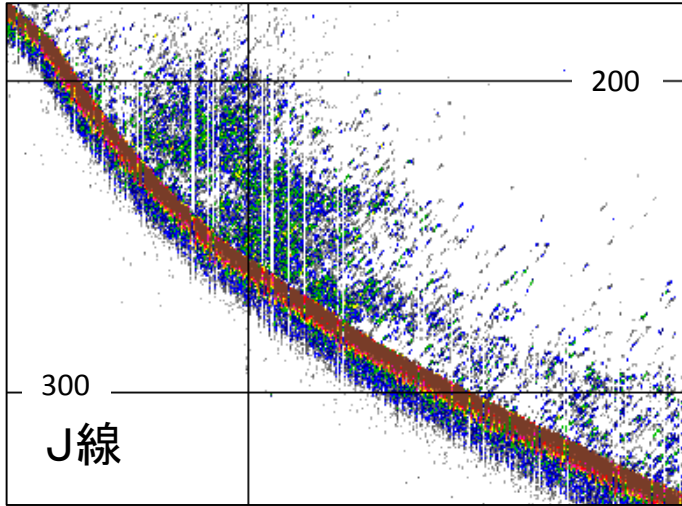
図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)  
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

水深(m)

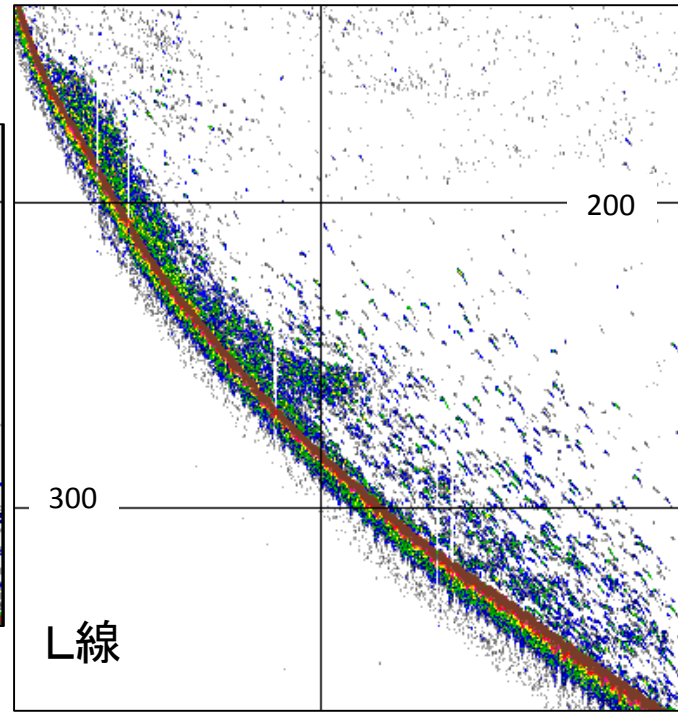


H線

水深(m)



J線



L線

図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき  
グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

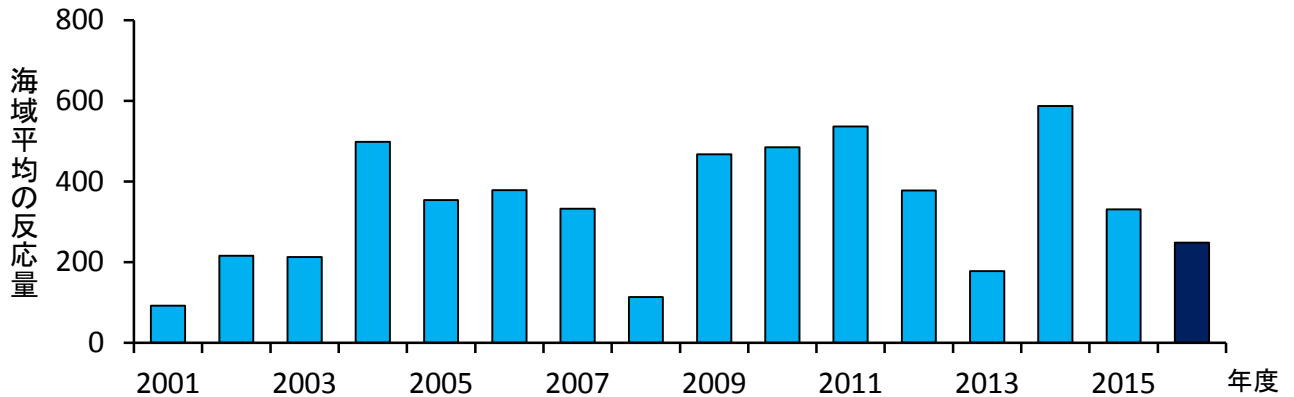


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

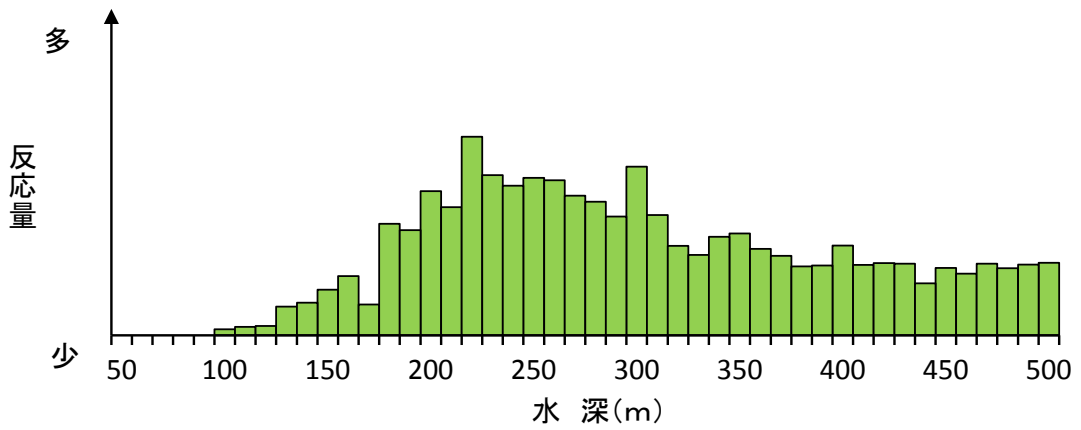


図4 水深別の魚探反応量

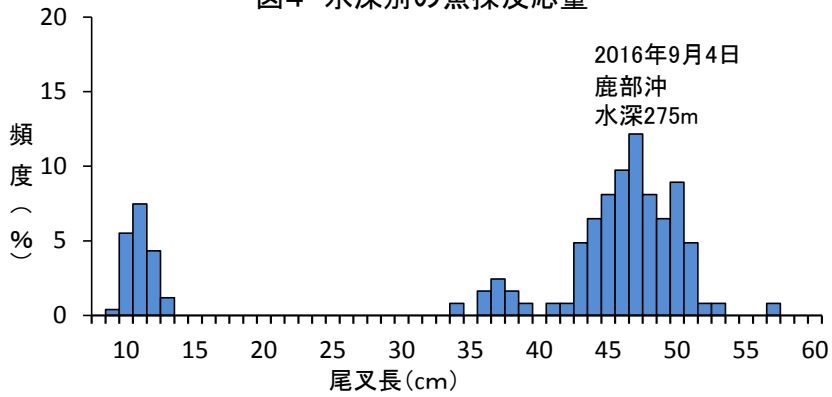


図5 漁獲物の体長組成

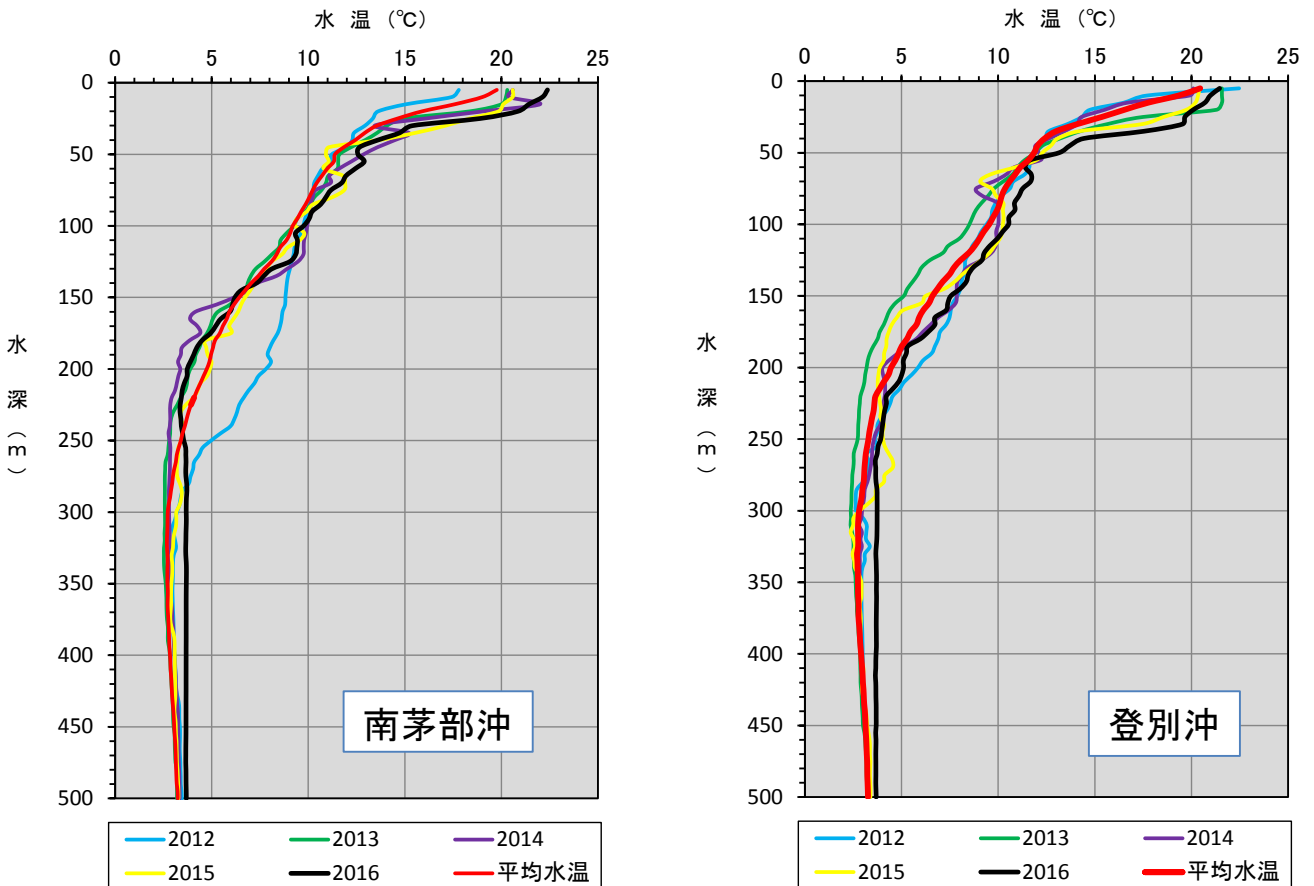


図6 9月上旬における水温の鉛直分布 左:南茅部沖(N42° ライン上), 右:登別沖(Hライン上)  
(過去平均:本調査における2002~2015年度のそれぞれの調査点の平均値)